

東北復興日記



138

五月の青空の下、子どもたちがシャボン玉を追いかけて芝生を駆け回る。真新しいビニール製の白い丘に登ってジャンプを繰り返しては大きな笑い声があがる。写真は、ここは、福島県双葉郡広野町にある二ツ沼総合公園。今年三日、四年ぶりに再開し、町主催で「ふれあいフェスタ」が開催されました。



いわきおてんとSUN
企業組合代表理事

吉田恵美子さん



町民憩いの場 再開

東日本大震災前、この公園は近隣の小学校の児童が遠足で必ず一度は訪れる場所でした。園内の長い滑り台に子どもたちは夢中になったものです。しかし、震災を境に風景は一変。福島第一原発事故収束のための拠点となり、作業員宿舎のプレハブと関係車両が敷地を埋め尽くしました。つ町には震災前とは違う空気が流れ、町が二〇一一年九月三十日にはいち早く緊急時避難準備区域を解除したにもかかわらず、なかなか町民の帰還が進まないという時期が続いていました。

そして、五年目の春、双葉郡の南端にあたる広野町から郡再生に向けて動きだそうと、ふたば未来学園高校が県立の中高一貫校として開校。それと足並みをそろえるように、町民にとって憩いの場である公園が再開することになったのです。

中央公園で毎月開催されているパークフェスの実行委員会が全面協力。にぎわい創出に一役買いました。このエリアには、私たち「いわきおてんとSUN企業組合」のSVO（ストリート・ベジタブル・オイル）使い古しのてんぷら油を車内で精製し発電する）電源カー「おてんと号」が自然エネルギーで発電。優しいBGMが流れ、ソーラーパネルとつながった小さな噴水とともに、憩いの場に彩りを添えていました。

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。